

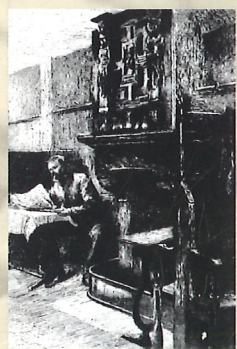
イギリス食文化:タヴァン／居酒屋

これまでのイギリス食文化史シリーズの続編として、宿屋(Inn)、居酒屋(Tavern)、パブ(Public House)といった飲食の場がイギリスの社会、文化においていかに重要な役割を持っていたかが判る著作を構成。Part 19 ではタヴァン、パブ、その他コーヒーハウスやクラブなど、「飲み」の場についてロンドンを対象にした重要著作を集成。

Contents

Volume 75: Edward Callow *Old London Taverns: Historical, Descriptive and Reminiscent, with Some Account of the Coffee Houses, Clubs, etc.* (1899) & Edward Forbes Robinson *The Early History of Coffee Houses in England* (1893) 2-in-1 vol.

ISBN 978-4-86340-332-1・648 pp.・25,000円+税



ヴィクトリア朝末期に出版された古いロンドンの飲み屋についての基本的な概説書 2 点を合本して復刻。キャロウ著 *Old London Taverns* の主要部分は、ロンドンの中心部シティの主要なローカル新聞 *City Press* で連載されたもので、世紀転換期にシティにあったタヴァンをはじめ、古いコーヒーハウス、チョップハウス、クラブについて書かれている。書籍化に際して著者が個人的に見知っていたテンプルバーより西のピカデリー界隈までのものを書き加えている。歴史的な逸話と著者自身の見解が合わさった内容で、居心地のよい雑然さがあつた古いタヴァンが煌びやかに飾り立てられた最新スタイルの飲み屋に変わってしまったこと、またゆっくりせずに「カウンターで立ったまま食事を済ます」ようになってしまったことなどを惜しんでいる。

ロビンソン著 *The Early History of Coffee Houses* は短いロンドンを中心とした古いコーヒーハウスの歴史研究として先駆的で重要なもので、当時の社会や政治との関わりが記されている。

[*Old London Taverns*] Part 1: The City of London: Aldgate to Temple Bar・The Old City Coffee Houses・The Old Bankers・Coffee-House Clubs・Curious Names of Taverns・Part 2: Westward Ho!・Old Clubs

[*Early History of Coffee-Houses*] Early Legends・Early History・Accounts by Travellers・Medical History・Earliest Coffee Houses under the Commonwealth・The Coffee House as a Social and Temperance Factor・Coffee Houses under the Stuarts: The Home of Liberty・Development and Decline・Bibliography・Appendices・Index to Coffee Houses

Volume 76: Henry C. Shelley *Inns and Taverns of Old London* (1909)

ISBN 978-4-86340-333-8・474 pp. (incl. 1 col.)・22,000円+税

エドワード期に出版された古いロンドンの飲み屋についての基本的な概説書。当時、イギリスの古いインやタヴァンに対するアメリカ人の強い関心が指摘されているなかで、本書はボストンとロンドンで同時に出版されている。著者シェリーはイギリス人ジャーナリストでロンドン、南アフリカで活動、のちにアメリカに渡って *Boston Herald* で活躍した。こうした題名ながらインやタヴァンの記述は全体の半分程度で、残りは歴史のあるロンドンのコーヒーハウス、クラブ、プレジャーガーデンについて紙幅が割かれている。ロンドンの文化的、文学的な活動においてこれらの場所が重要な役割を果たしてきたことに注意が払われている。

Inns and Taverns of Old London・Coffee-Houses of Old London・The Clubs of Old London・Pleasure Gardens of Old London・Index



Volume 77: Leopold Wagner *London Inns and Taverns* (1924) & *More London Inns and Taverns* (1925) 2-in-1 vol.

ISBN 978-4-86340-334-5・508 pp.・23,000円+税

戦間期の飲み屋についての最も詳しい概説書 2 点を合本。歴史的なインやタヴァンとともに、特に 1920 年代のロンドンでお酒が飲めた場所に特別な関心を寄せている。パブだけでなく、劇場、ミュージックホール、ワインバー、カフェ、ホテル、レストラン、キャバレーなどが取り上げられ、第一次世界大戦後のロンドンの社会生活において重要な側面が記録されている。本書についてもう一つ注目すべき点は、後にグレイター・ロンドンに編入されることになる郊外の町を含め、都市中心から離れた周辺エリアのパブを取り上げていることである。都市中心部以外に注意が払われることはあまりなく、貴重な著作といえる。著者ワグナーは 20 世紀初期のジャーナリストで、ロンドンの新聞・雑誌で主にコラムや演劇評論を書いた人物。

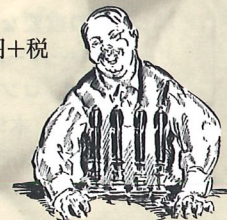
[*London Inns and Taverns*] Links with the Past・Vanished Inns of the City・The Convivial Haunts of Cornhill・Vanished City Taverns・Historic City Taverns of Today・Old London Coffee-Houses・The Inns of Southwark・Transpontine Taverns・Some Southern Suburbs・Way Down East・Shoreditch and Its Public Shows・Round Clerkenwell・Due West of the City・“Refreshers” at Palaces of Pleasure・“The Halls” of Other Days・Bygone London Night Haunts・Index

[*More London Inns and Taverns*] “The Dear Old Strand!”・Charing Cross and Westminster・Leicester Square and Soho・“Stony-Hearted Oxford Street”・“The Street of Adventure”・Piccadilly and Mayfair・Knightsbridge and Kensington・The Pleasure Haunts of Chelsea・“Merrie Islington”・North London Pleasure Gardens・From Blackfriars to Hampstead・The Highgate Inns・Southern Suburbs Far Afield・The South-West Suburbs・The Kentish Quarter・Beyond Bow Bridge・Index

Volumes 78: Ernest Selley *The English Public House As It Is* (1927) & Thomas Burke *Will Someone Lead Me to a Pub?* (1936) 2-in-1 vol.

ISBN 978-4-86340-335-2・278 pp.・17,000円+税

特徴的な 2 点を合本。セリー著 *The English Public House* は、パブを 1920 年代の社会的な施設と捉えた初めての研究書で、特に労働者階級における役割を示した社会学的な内容のもの。当時イギリス国内には、ライセンスを発給されたパブが 8 万軒以上あるなか、著者は 2 年以上かけて、ロンドン北部、東部を含む、主に産業立地のおよそ 30 の町や都市のパブを調査、パブの改善運動、カーライルにおける醸造とパブの国有化実験、女性の日常的な利用などについて論じている。著者はジャーナリスト、労働党の活動家で、第一次世界大戦後の「酒類取引の国有化と制限キャンペーン」を担当した。パーク著 *Will Someone Lead Me to a Pub?* は、1930 年代のロンドンの、歴史ある特徴的なパブについての楽しいエッセイ。本シリーズ 74 巻の編者でもあるパークは戦間期のロンドンについての多くの物語やノンフィクションを書いている。挿絵は 20 世紀初期によく知られた画家で版画家のフレデリック・カーターで本の装丁も手掛けた。題名は G. K. チェスタトンのユーモア詩の一節から採られたもの。



[*The English Public House*] Scope and Method of Inquiry・What Is the Public House?・The Uses Made of the Public House・Types of Houses・Defects and Abuses・Pioneers of Reform・Carlisle State Management Scheme・Reform by the Trade・The Public House Habit among Women・Have Drinking Habits Improved?・Registered Clubs・Conclusion・Index

[*Will Someone Lead Me to a Pub?*] ———

タヴァン、イン、パブ、コーヒーハウスが醸成する公共圏の重要性

—Athena Library of English Studies, Part 19を推薦する—

原田 範行 ● 慶應義塾大学教授

「個人の家では、いい居酒屋のように楽しめない(略)人間が考え出したものの中で、いい居酒屋や旅館ほど幸福を生み出せるものはあるまい」—— 18世紀の文豪サミュエル・ジョンソンのこの言葉は、イギリスの居酒屋(tavern)や旅館(inn)、あるいは、パブ(pub, public house)やコーヒーハウス(coffeehouse)が有する重要な文化的・社会的機能とその日常性を見事に表現している。新型コロナウイルス感染拡大を受けて、イギリスでも日本でも、こうした公共の場が閉ざされた現在(2020年4月)、それはいっそう深く重く、私たちの心に響く。Athena Library of English StudiesのPart 19が、今、こうした公共圏の重要な機能に焦点を当てて刊行されることの意義は大きい。

タヴァンやイン、パブ、コーヒーハウスについては、今日でも案内書は少なくない。ただ、それらには少なくとも二つの問題がある。一つは、こうした施設の有する日常性、現実性のゆえに、記述がしばしば著者個人の経験や印象に委ねられ、体系的に整理して理解しようとするのが困難が生じやすいということ、もう一つは、伝統的なタヴァンやインが20世紀半ば以降の急速な社会変化の中でいささか形を変えてきており、それらが果たしてきた(そしてこれから果たしうる)機能を本格的に考察しようとする場合、現状をいったん離れて歴史的に検討することが必要である、ということである。今回、Athena Libraryが、19世紀後半から20世紀前半にかけての貴重な、しかしいづれも入手困難な文献を復刻する意味はここにある。各文献に付された索引や文献書誌だけでも、価値ある歴史資料となる。

人々が集い、飲食という日常的な行為をともにしながら、さまざまなコミュニケーションがおこなわれ、ある種の合意形成が進み、なによりも各人が安心感を抱き、また好奇心を養う、そのような場——タヴァンやインの文化を考えるには、さまざまな視点があろう。例えば、本シリーズ第77巻所収の*London Inns and Taverns*の冒頭で、著者は、こうした文化が「歴史研究および社会学」への関心を惹起すると述べている。もちろん文学作品にもタヴァンやインはたびたび登場し、その重要な舞台となってきた。14世紀末に成立したジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』において、巡礼の旅人が出発するのは、ロンドンのテムズ川南岸の「陣羽織亭」(The Tabard Inn)であった。本シリーズ第76巻に収録された*Inns and Taverns of Old London*にはその詳説がある。現在も営業を続けているロンドン

の「チェシャー・チーズ」(Ye Olde Cheshire Cheese)は、18世紀のジョンソンはもちろん、19世紀にはチャールズ・ディケンズやアメリカのマーク・トウェインが通ったことで知られるが、これについては第75巻所収の*Old London Taverns*が役に立つ。Cheeseの俗用語義の変遷にまで触れられているから、英語史の学習にもなる。19世紀後半の女性作家ジョージ・エリオットの名作『サイラス・マーナー』では、主人公の暮らす架空の村に「虹屋」(The Rainbow Inn)というインがあり、ここでの村人のつながりが、偏屈な主人公の心を開いていくことになるのだが、この「虹屋」は、「牡牛屋」(The Bull Inn)という実在のインをモデルにしている。女性と居酒屋については、第78巻所収の*The English Public House As It Is*に詳しい説明がある。19世紀末から20世紀にかけて、都市化の進むロンドンは次第に周辺の郊外をも飲み込んで行ったが、そういう郊外にあって転々と下宿を変えていたのが、当時留学中であつた夏目漱石である。彼が「辺鄙な所」と呼んだそういう郊外でのパブの役割を説明してくれるのが、第77巻所収の*More London Inns and Taverns*だ。

タヴァンやイン、パブの機能は、本シリーズに収録された文献の後、今日に至るまで連綿と受け継がれてきた。医学や生命科学を考える上で今や日常用語とも言えるDNAの仕組みを、ジェイムズ・ワトソンとフランシス・クリックが解明したのは1953年2月28日のこと。彼らは、ケンブリッジ大学のそばで1667年から営業を続けている「イーグル」というパブでランチを食べながら、この偉大な発見に到達したのであった。優れた発想の源泉が、あるいはアイデアを実現するに至る豊かな議論の基盤が、タヴァンやイン、パブにはある。単なる飲み屋ではなく、また会議スペースでもない、そのようなpublicな場の重要性を、今、このAthena Libraryを通じて検討すべきなのではあるまいか。



【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】